

台北駅前と北門、忠孝西路を歩く

片倉 佳史

台北は人口260万を数える大都会。その中心部に位置する台北駅は今も昔も変わることなく、この街の玄関口となっている。今回は台北駅周辺と忠孝西路沿線、そして北門を紹介してみたいと思う。

台北駅前にそびえるランドマーク

台北駅を降り立ってみると、すぐ目の前に大きくそびえる高層建築が見える。このビルは新光摩天大樓と呼ばれ、高さ244・15メートルを誇る。2005年、101階建ての高層ビル・台北101が竣工したことで、「台湾随一」という称号は手放してしまっただが、台北のシンボルであることに変わりはない。駅前というロケーションもあり、その存在感は全く衰えていない。

このビルがある場所には、台湾総督府鉄道部が運営していた高級ホテルがあった。その名も「鉄道ホテル」。備品はほぼすべてが舶来物で統一されていたという宿泊施設で、台湾を代表する最高級クラスのホテルだった。

残念ながら、この建物は1945（昭和20）年の大空襲で瓦解し、戦後も復活することはなかった。現在のビルが完成したのは1993年12月のこと。51階建てで、4年9ヶ月の歳月をかけて造営され



台北のランドマークとして君臨する台北車站（駅）。その向かいに位置する新光摩天大樓の敷地は、台湾随一の高級ホテルがあった場所である。

たものである。

現在、13階までは日系の三越百貨店が入っており、常時多くの人で賑わっている。そして、正面玄関で脇を固める獅子の像は、定番の待ち合わせスポットとなっている。

台湾を代表する宿泊施設—台北鉄道ホテル

日本統治時代、台湾を代表する宿泊施設となっていた鉄道ホテルについて紹介しておきたい。

終戦まで、台北駅前一带は表町と呼ばれ、駅の正面には駅前通りとして表町（おもてまち）通りがあった。現在、この通りは館前路と呼ばれている。長さにしてわずか400メートルほどではあるが、この道路の両側には美しい商店建築が並び、壮観な眺めとなっていた。北の突き当たりには台北駅、そして南には台湾総督府博物館（現国立台湾博物館）があった。ホテルもこの表町通りに面していた。

このホテルは台北鉄道ホテルというのが正式名称だった。オープン時は台湾では唯一だった西洋式ホテルで、経営は交通局鉄道部が直接行っていた。備品は舶来物で占められており、その高級ぶりは広く知られていた。

緑の中に浮かび上がる赤煉瓦建築

鉄道ホテルは城壁を撤去して設けられた三線道路を挟んで台北駅に対峙していた。住所は台北市表町2丁目7番地。1943（昭和18）年度の台北市商工会議所の名簿には、支配人として福島篤の名

が記されている。

前回は触れたように、現在の台北駅は旧駅舎を使用しながら東に隣接して造営された。つまり、旧駅舎は現在の館前路の突き当たりに位置していた。この鉄道ホテルは駅を降り立った利用客から見て、左手前方に見える位置にあったのである。

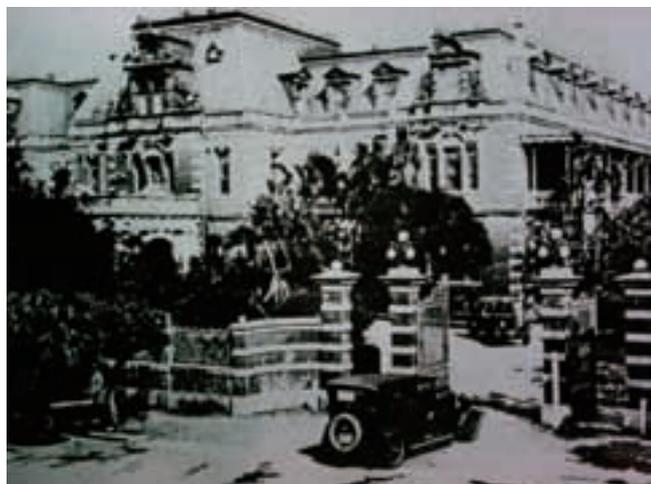
建物は赤煉瓦と石材を混用した造りの3階建てだった。いわゆるルネサンス様式に分類される建物で、敷地面積は3069坪、建坪は620坪あまりとなっていた。

起工式は1907（明治40）年6月21日に行なわれている。落成は翌年の10月16日。20日に台中で挙行される縦貫鉄道の開通式典に合わせたものだった。施工は大倉組（現・大成建設）が請け負った。

ホテルの営業開始日は1908（明治41）年11月1日である。宿泊客の第1号として名が記されたのは閑院宮載仁親王だった。親王は台中の式典に参列した後、台北に戻ってここに宿泊。台湾神社を参拝した後に晩餐会が催されている。

なお、このホテルの設計者については、台湾総督府土木局営繕課技師である野村一郎と鉄道部技師の福島克己の名が挙げられる。

野村は1900（明治33）年から総督府の技師として手腕を振るった人物で、台湾総督府博物館（現・



壮麗なたたずまいを誇った鉄道ホテル。昭和20年5月31日の空襲で瓦解した（日本統治時代発行の絵はがきより）。

国立台湾博物館）や台北水源地ポンプ室（現・自来水博物館）などの設計で知られる。

福島は東京帝国大学工科大学建築科で、辰野金吾に建築を学んでいる。1905（明治38）年に台湾総督府技師に任ぜられ、5年後に海軍技師に任命されて台湾を離れている。

壮麗を極めた館内の様子

日本統治時代に記された文献をもとに、このホテルの様子を誌上で再現してみよう。

この建物は3階建てで客室数は30だった。プールやテニスコートなどもあった。なお、備品や調度品はすべてイギリスから調達され、食器類はもちろんのこと、便器や洗面台までもがイギリス製で統一されていたという。

玄関を入ると、まずはロビーがあり、右手にバー、左手に階段とクロークがあった。バーの奥には当時としては非常に珍しいビリヤード場があり、向かいには理髪室があった。その奥には小食堂が2室あり、余興用のステージなども設けられていたという。

ロビーは間取りの図面から推測すると、45坪程度の広さがあったようだ。その奥には中庭を隔てて大食堂があった。ここは250名あまりを収容できる宴会場でもあった。立食のスタイルであれば500人の規模でも可能だったという。

また、台湾総督府庁舎と同様、公共スペースにおける禁煙が徹底されていた。そのため、喫煙室が数カ所に設けられ、1階ではロビーの左手にあった。なお、その先には読書室、支配人室、化粧室などがあった。

2階と3階は客室のスペースとなっていた。3階がほぼすべて客室で占められているのに対し、2階には広間と大小の集会室、喫煙室、図書室があった。建物正面の両脇は、いわゆるコーナー・スイートとなっており、通常は特別室と呼ばれていたという。

料理についても特筆すべき点が多い。宿泊費が破格の高さに設定されていたこともあり、レストランやカフェだけが利用されるということも多かったようだ。館内には大小2カ所の普通食堂のほか、洋食が自慢のグリルがあった。ここも食器はすべてイギリスから輸入されたもので、ワインなども種類が充実していたという。

余談ながら、筆者は取材の過程で複数の老人から、ここが台湾で最初にアイスクリームの販売が行われた場所であるという話を耳にした。週末限定で庭園に露店を出し、そこで販売されていたという。これもまた興味深いエピソードである。

大空襲で灰燼に帰したホテル

残念ながら、栄華を誇ったこのホテルも、その壮麗さゆえに戦禍を被ることとなった。

米軍による空爆は1944（昭和19）年10月から本格化していたが、「台北大空襲」と呼ばれる1945年5月31日午前10時から始まった空襲でこの建物は被弾した。それによって火災が発生した。この時、火は3日間にわたって建物を焼き尽くしたという。

同日の空襲は日本人居住区だった「城内」が集

中砲火を浴び、台湾総督府や総督府図書館、台湾電力会社などが被弾した。市民3千名が死亡し、重軽傷者は数万名におよんだという。

米軍はこの日、軍事施設と経済活動の拠点を狙って空爆をしかけたと言われている。しかし、建物の壮麗さと知名度の高さ、そして、「駅前」という立地にも攻撃効果を感じたのだろうか。この建物も攻撃対象となった。豪華さで知られた名建築は、竣工から37年後に廃墟と化してしまった。

今となっては古老たちの記憶と古写真の中にその姿が残るばかりである。

城壁跡に設けられた道路

次に台北駅と新光摩天大樓の間を走る忠孝西路について触れてみたい。この道路はかつての城壁跡に設けられたもので、終戦まで「三線道路」と呼ばれていた。

本連載の第一回目で記したように、清国統治時代末期の台北は城郭都市だった。三線道路も清国統治時代の城壁跡を整備したものである。道路は当時の市街地を外周しており、現在の地図で言えば、北辺が忠孝西路、西辺が中華路、南辺が愛国西路、東辺が中山南路となっている。



日本統治時代の古地図。台北駅の位置は現在よりも西側にある。鉄道ホテルの敷地がいかに広がりがわかる。

ちなみに三線道路の道幅は約 40 メートルで、緑地帯が設けられていた。街路樹には南国らしさを感じられるものだけが選ばれ、ガジュマルや大王ヤシ、ピンロウ樹などが植えられた。そして、花壇が設けられていた。

城壁は匪賊から都市住民を守ることを名目に設けられた。しかし、実際は統治機関が集まるエリアを守るためのもので、治安の不安定な時代の産物である。高さは 5 メートル、幅は 4 メートルほどだったと伝えられている。完成は 1884 年であった。

しかし、新来の統治者である日本はこれを不必要なものとした。そして、民政局長（後に民政長官と職位改名）の後藤新平が進めた疫病対策の政策下、上下水道設備の用材不足を補うべく、この城壁の石材が使用された。

余談ながら、こういったケースは台北に限らない。新竹や宜蘭などでも同様のケースが見られる。

新竹の場合、城壁跡は濠として整備され、現在は公園となっている。城門は迎曦門（東門）を除いて撤去されているが、迎曦門はロータリーの中央に残され、半地下状態になったスペースには城壁の残骸が展示されている。

宜蘭の場合は城壁跡地が道路となっている。現在も市街地をとり囲んでいるので、城壁の跡であることは容易に推測できる。新竹と同様、当初は濠が設けられたが、現在は埋め立てられ、道路となっている。

忠孝西路を歩く

忠孝西路は中山北路・南路との交差点から西側に伸びている。距離にすればわずか 2 キロに満たない。かつての台北駅の駅前広場の南辺を走っており、その上には往時の姿を留める唯一の城門・北門がある。

この道路はかつての縦貫道路の一部である。縦

貫道路とは、基隆を起点に台北を經由し、台南・高雄までを結んでいた幹線道路である。主に陸軍の手によって造営されたもので、当初は陸軍道路とも呼ばれたようである。文字通り、台湾の大動脈だった。

現在の地図で言えば、台北駅前から東に向かって忠孝東路となり、その先は八徳路となっている。現在の台北を東西に貫く忠孝東路は戦後に整備されたもので、八徳路のほうが歴史は古い。

なお、縦貫道路を西に向かうと新莊市があり、さらに進んでいくと省道一号線となる。これをひたすら進んでいけば、台中や台南、そして高雄まで続いている。

忠孝西路の起点となる交差点には、かつて大島久満次の立像があった。大島は台湾総督府警視総長や総務局長などを歴任し、第 5 代台湾総督の佐久間左馬太の下、民政長官を務めた人物である。

ここには大きなロータリーが設けられ、その中心に銅像があった。終戦時、南東には台北州庁舎（現監察院）、北東には台北市役所（現行政院）があった。これらの庁舎はいずれも往時の姿を留めており、古蹟として扱われている。

その先、現在の公園路までの一角は第 7 代台湾総督の明石元二郎にちなんで明石町と呼ばれていた。しかし、台北を代表する商業地域だけあって、日本統治時代の建物はほとんど残っていない。公園路を越えたところには日の丸館という旅館があったが、ここも痕跡を残していない。

凱撒大飯店は 1973 年にヒルトンホテルとして竣工したビルである。当時は台北で最も高いビルと謳われた。そして鉄道ホテルの跡地に建つ新光摩天楼大樓の前を通る。この辺りは先述したように表町と呼ばれていた。

重慶南路との交差点には消防署がある。ここは建物こそ新しくなっているが、日本統治時代から消防署があった場所である。この辺りは本町 4 丁目と言われていた。



日本統治時代に撮影された台北州庁舎の様子。手前に大島久満次の銅像が見える。



日本統治時代に表町通りと呼ばれていた館前路。正面には旧台湾総督府博物館があり、手前には台北駅（旧駅舎）があった。

往時の姿を保つ北門

この先、高架道路の影になってしまっていて見えないが、旧台北城の北門が残っている。台北城の城門は東西南北の4つがあり、後に小南門が設けられた。このうち、西門は日本統治時代に撤去され、ロータリーとなって消滅。東門と南門は戦後、中華民国政府によって、中国北方のスタイルに改造されてしまった。現在、清国統治時代の姿を唯一保っているのはこの北門だけとなっている。

北門は正式には承恩門を名乗る。1884年に造営されたもので、現在は国家が管理する古蹟となっている。ここは1895（明治28）年、下関条約によって台湾を得た日本が最初に台北入城を果たした場所である。日本軍はこの門から現在の博愛

路を進んで当時、清国の行政庁舎があった布政使司衙門に向かった。後に日本軍は初代の総督府をここに開庁している。

1935（昭和10）年には史跡名称天然記念物保存法が制定され、ここも古蹟として扱われることになった。戦後は無計画な高架道路計画によって、北門の前後左右に高架道路が走るという無惨な姿になっていたが、現在は一部が撤去され、以前よりは見通しが良くなっている。

なお、小さくてわかりにくいのが、この城門の傍らに日本統治時代に設けられた水準点の基標が残っている。小さな石塊だが、ここが台湾各地を測量する際の基準となっていた地点かと思うと感慨を禁じ得ない。説明板などは何もないが、北門を訪れた際には注意を払いたいところである。



竣工時の様子を留める北門。現在は古蹟の指定を受けている。台北城には大小合わせ5箇所の城門があった。



北門の傍らに残る日本統治時代の水準点。

中華郵政台北郵局

北門の傍らに立ってみると、目の前に重厚感を

漂わせた大きな建物が迫っている。これが日本統治時代の台北郵便局である。現在は民営化を経て、「中華郵政台北郵局」という名が付されている。

かつて、この一帯は京町と呼ばれていた。ここに郵便局が開設されたのは北白川宮能久親王率いる近衛師団が台北入城を果たした時に遡る。当時は「野戦郵便局」を名乗っており、木造平屋の極めて簡素なものであったという。しかし、後にこれが大火に見舞われて焼失。新庁舎が造営されることとなった。

新庁舎が竣工したのは1930年（昭和5）年のことである。施工は台湾総督府官房営繕課、設計は総督府技師・栗山俊一に委ねられた。

3階建ての大きな建物は、落成と同時に内外の建築家たちの注目を集めたという。その独特な風貌は、今もなお、見る者すべてを圧倒している。

ここは植民地台湾の中央郵便局としての機能を持ちあわせていた。そのため、開設時から一等局の扱いを受けていた。正面に大きな玄関口が設けられ、業務用自動車は後方の左右にある端部から入るようになっていた。建物の背後には広い作業用スペースが確保されていた。

台湾における昭和初期は、鉄筋コンクリート造りが普遍化した時代である。これは関東大震災を経て台湾においても建築基準が厳しくなったのが理由である。これに伴い、シンプルなデザインがもてはやされていた、この建物も西洋風の凝った装飾を随所に残しつつも、全体としては整然とした雰囲気仕上げられている。言ってみれば、古典建築と現代建築のいずれの要素も含む過渡期のデザインであった。

印象的なのは外観だけではない。館内に足を踏み込むと、まずは高い天井に驚かされる。広々とした空間には開放感が漂い、厳つい外観とはずいぶん異なった印象を与えている。なお、現在、使用されているカウンターは竣工当初からのものであるという。その用材には宜蘭・蘇澳方面で採掘

された大理石が用いられた。

竣工からすでに80年の歳月を経ているが、現役の郵政庁舎として、今も君臨している。発展を続ける台北市内で、どっしりと存在感を放っている建物である。



重厚感を漂わせる台北郵政総局の庁舎。その起源は領台直後に設けられた野戦郵便局に遡る。



館内もまた、美しい装飾が施されている。なお、もともとは3階建てだったが、戦後に増築されて現在は4階建てとなっている。



後方には広い作業場があった。かなり広い敷地を誇っていた。

郷土博物館に生まれ変わった洋館建築

延平南路に撫臺街洋樓という瀟洒な建物が面している。北門にも近く、やや雑然とした町並みの中にあるためか、ひととき個性を放っているように見える。

この一帯は当初、撫台街と呼ばれていたが、後に大和町と改められている。終戦まで、「内地人」を名乗っていた日本人居住者が多く住んでいたエリアである。

この建物は現在、撫臺街洋樓と呼ばれている。台北の歴史を紹介するための郷土資料館で、台北市の資料によると、建物の竣工は1910（明治43）年であるという。建設会社の合資会社高石組（後に株式会社となる）が社屋として建てたものである。「洋樓」とは洋館を意味する中国語である。

高石組は領台当年に台湾へやってきた高石忠健という人物が1901年に創設した会社である。台湾総督府博物館や日月潭水力発電所などを手がけ、手広く事業を展開していた。

この建物が建てられる前年、台北は未曾有の暴風雨に見舞われ、家並みの大半が崩壊するという惨事となった。これを機に大がかりな都市計画が練られ、町並みは一新された。この建物もその際の整備計画に従って造営された一棟である。

その後、建物は酒造業者であり、酒類の輸入・販売も行っていた佐土原商会の社屋に変わる。経営者の佐土原吉雄は名士として知られ、台湾総督府が発行していた「紳士年鑑」にもその名を見ることができる。

1941（昭和16）年の資料には佐土原商事株式会社という社名の記載がある。これは前年に登記された名称で、会社創設は1940（昭和15）年2月となっている。住所は台北市大和町4丁目8番地。資本金は18万円だったという。

建物の一階部は石組みの半円アーチとなっている。階下が堅固な造りとなっているのは、安定感を

強調したいという建築家の意図であろうか。二階部は木造となっており、両者が組み合わさることで優雅な雰囲気が醸し出されている。なお、用いられた石材は台北城の城壁を撤去した際に切り出されたものと伝えられている。

終戦後、この建物は中華民国政府に接収された。そして、長らく警備總部、そして国防部の管轄下に置かれていた。さらに後には、民間に払い下げられ、漢方医学の診療所となっていた。1997年には台北市から歴史建築として古蹟の指定を受けたが、隣宅の火災によって、建物の木造部分が焼失。その後は長らく放置されていた。そういった影響もあって修復工事は長引き、5年の歳月が費やされた。

なお、現在、この一帯にはカメラ機材を扱う店が軒を連ねており、「台北照相街」（カメラ・ストリート）と呼ばれている。



日本統治時代初期の洋館建築。現在は陳国慈女史が台北市から委託を受け、運営している。2010年7月には福岡県から高石氏の遺族が招かれ、盛大な式典が行われた。



「亭仔脚（ていしきゃく）」と呼ばれる台湾式アーケード。石組みが基本で、火災にも耐えうる。この場合、石材は台北城の城壁に用いられていたものが転用されたと伝えられる。

知られざる歴史建築—旧東京堂時計店

台北市内には多くの歴史建築が残り、現在は行政によって保存対象となっている物件が少なくない。しかし、これは公共性が重視されており、多くは官庁舎か公共建築物である。中にはほとんど知られることもなく、埋もれてしまう老建築も見られる。

この建物は旧台北郵便局と同様、京町と呼ばれた地区にある。Y字型に交わる延平南路と博愛路の交差点にあり、北門と向かい合う位置にある。博愛路を挟んだ向かいには中華郵政台北郵局・台北北門郵局がある。

日本統治時代の古写真を見ると、この建物の1階は東京堂時計店と看板が出ている。そして、2階は中央食堂という名のカフェ・レストランとなっている。壁面には大きく台北と草山（現陽明山）・北投を結ぶ循環バスの宣伝文句が記されている。これは「巴（ともえ）自動車商会」という会社によって運営されていた。

古老の証言によれば、終戦間もない頃は外省人一家が経営する理髪店だったという。その後、何度か家主が変わり、現在は撮影機材を扱う商店となっている。

屋根は部分的に補強工事が施されているが、建物そのものは大きな改造を受けた痕跡がない。窓の並び方なども古写真と同じで驚かされる。



建物は2本の道路がY字型に交わる地点にある。左手は博愛路、右手が延平南路となっている。



戦前に撮影された古写真を見ると、この建物が当時からのものであることがわかる。台北郵便局がわずかながら見える。

内部に入ってみると、随所に改築の手が入っているため、この建物の歩みを感じ取ることは難しい。しかし、古写真を手にして向かいあい、細部を見比べていると、徐々に往年の様子を思い描けるようになる。

旧三井物産株式会社倉庫

最後に、忠孝西路の北側に面した歴史建築を紹介しておきたい。ここはつい最近まで、その詳細が全く知られることのなかった建物である。

ここは赤煉瓦の壁面と黒瓦を擁した屋根が印象的な建物である。正面には三箇所の窓が並んでいる。階下には三連の亭仔脚（騎樓）が4本の柱とともに連なる。決して大きな建物ではないが、しっかりとした造りであることは伝わってくる。

この建物についての詳細は長らく不明だった。戦後、紆余曲折を経て台湾鐵路管理局の管理下に入り、2002年以降は廃屋となっていた。傷みはあるものの、建物としての保存状態は良好だ。

この建物は日本統治時代に建てられた三井物産株式會社倉庫ではないかという推測が出されていた。ただ、戦前の登記資料は見あたらず、建物としても、倉庫というよりは商店建築と判断するほうが自然に思える。しかし、建物の正面上方に菱形で象られた同社の商標が描かれており、1949年

に撮影された古写真にもはっきりと三井の商標が記されていることから、三井物産に関わる建物だろうと言われていた。

台北市政府（市役所）は専門家による鑑定調査を実施したが、やはり詳細を突き止めることはできなかったようだ。筆者はこれまで、台湾の古老と戦前の台湾に生まれ育った日本人への聞き取りを繰り返してきたが、ここに三井の倉庫があったことを記憶している人に会ったことはない。しかし、終戦からわずか4年後の1949年に撮影された古写真が語る事実は大きい。やはり、日本統治時代から三井の商標は描かれていたと考えるのは妥当だろう。

戦時中の空爆からも逃れ、今もその姿を保っていることは奇蹟に近い。今後、より深い考証が待たれている。

次回も引き続き、台北駅周辺のエリアを紹介したいと思う。



赤煉瓦の壁面が印象的な建物である。往来の激しい忠孝西路に面しているが、目の前を高架道路が通っているために、閉塞感がある。「三井」のロゴについての真相は不明なままである。

